

近世期における富士山信仰とツーリズム

松井圭介* 卯田卓矢**

Tourism and Religion in the Mount Fuji Area in the Pre-modern Era

Keisuke MATSUI* and Takuya UDA**

[Received 25 October, 2015; Accepted 16 November, 2015]

Abstract

This paper examines the relation between traditional pilgrimages to Mt. Fuji and related tourism in the pre-modern era. It takes into account the worship of Mt. Fuji as a sacred mountain and the activities of *oshi* pilgrim masters (low-ranking Shinto priests) who organized pilgrimages. Chapter II presents an overview of the worship of Mt. Fuji in its original form before modern times, and the historical development of that worship. Like other sacred mountains in Japan, Fuji was worshiped from a distance as a *kannabi*, a place where gods were believed to be enshrined. It was also worshiped as an area of the underworld, *takai*, where ancestral spirits rested. In addition, the mountain was thought itself to be a god: both a benevolent god who brings water and an angry god who brings natural disasters through volcanic eruptions. Historically, pilgrimages by ascetics to Mt. Fuji are first found in sources from the Heian era to the Kamakura era. Subsequently, Mt. Fuji gradually became one of the mountains of Shugendo, a Japanese ascetic-shamanist belief system incorporating Shinto and Buddhist concepts. Chapter III examines the establishment of devotional Fuji confraternities, called *Fuji-ko*, and the popularization of pilgrimages in modern times. The viewpoints of the various types of *Fuji-ko*, their religious beliefs, and aspects of their pilgrimages are discussed. In general, a *Fuji-ko* confraternity consisted of three officers—*komoto* (host of the *ko*), a *sendatsu* (guide), and *sewanin* (manager)—and members. They made pilgrimages in a three-to-ten-year cycle; the journey was usually a round trip of eight days and seven nights from Edo (the former name of Tokyo) to the mountain, arranged by *oshi* at Kamiyoshida, at the mountain's foot. Although Fuji was the main destination, others were often included. Some of these were sacred places related to Kakugyo (the founder of the pilgrimage to Mt. Fuji) and Jikigyo Miroku (the famous leader of Fujiko in the Edo era), and other sacred mountains such as Mt. Ooyama. Chapter IV examines the characteristics of Kamiyoshida, the village of *oshi* priests, which provided pilgrims with a range of services, including accommodation and assistance in climbing the mountain. Kamiyoshida was a particularly large settlement among those at the foot of Mt. Fuji, featuring large residences and rectangular zoning with special entrance roads. At its peak, the village had more than 100 houses aligned in a row. It was very prosperous in summer, when pilgrimages were most frequent. Chapter V examines characteristics of the pilgrimage destination and politics of location. The fact that citizens of Edo could view Mt. Fuji even though it was far away gave it a disarming allure and familiarity. Climbing the mountain was regarded as a great accomplish-

* 筑波大学生命環境系

** 筑波大学博士特別研究員

* Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan

** School of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan

ment, and in this way the pilgrimage became a journey of faith. The *oshi* priests, as the receiving party, created various legends of faith to draw pilgrims to their village rather than other starting points to Mt. Fuji or other shrines or temples. These legends contributed to the rise of Kamiyoshida and the *oshi*, and ultimately to their downfall.

Key words : Fuji faith, mountainous religion, Fuji confraternity, religious priest, pilgrimage, tourism

キーワード：富士信仰，山岳信仰，富士講，御師，社寺参詣，ツーリズム

I. はじめに

富士山は独立峰として秀麗な山容をもつとともに、日本最高峰の山として、古来多くの人びとの崇敬を得てきた。富士山が頂く万年雪は豊富な湧水をもたらし、山麓の民に恵みを与えた。その一方で有史以来噴火を繰り返してきた富士山は、自然災害をもたらす存在として畏怖されてきた。

近世中期以降になると、俗に「江戸八百八講、講中八万人」と称されるほど、江戸市中には数多くの富士講¹⁾が組織され、江戸および近郊の人々はこぞって富士山へ登拝した。図1は、60年に一度の富士山の御縁年（庚申）時における登拝の

様子を描いたものである。富士山北口（吉田口）において無数の男女の登拝者が群参している様子が描かれている。御縁年の登拝は、通常の年よりもご利益があるとされ、富士山は多くの参詣客で賑わった。江戸時代の富士山は女人禁制であったが、御縁年の際には登山結界が通常の2合目から4合5勺の御座石浅間神社まで引き上げられたので、女性の参詣客も多くみられた（富士吉田市歴史民俗博物館，2006）。

江戸庶民にとって富士山は親しみを感じる対象であるとともに聖なる存在であったことは、葛飾北斎の『富嶽三十六景』に描かれた風景画や浮世絵などからもうかがい知ることができる。こうし



図1 富士山北口男女登山（原図：北口本宮富士浅間神社蔵）。富士吉田市歴史民俗博物館，2006より。

Fig. 1 Climbers at the north entrance of Mt. Fuji. Source: Fujiyoshida City Museum (2006).

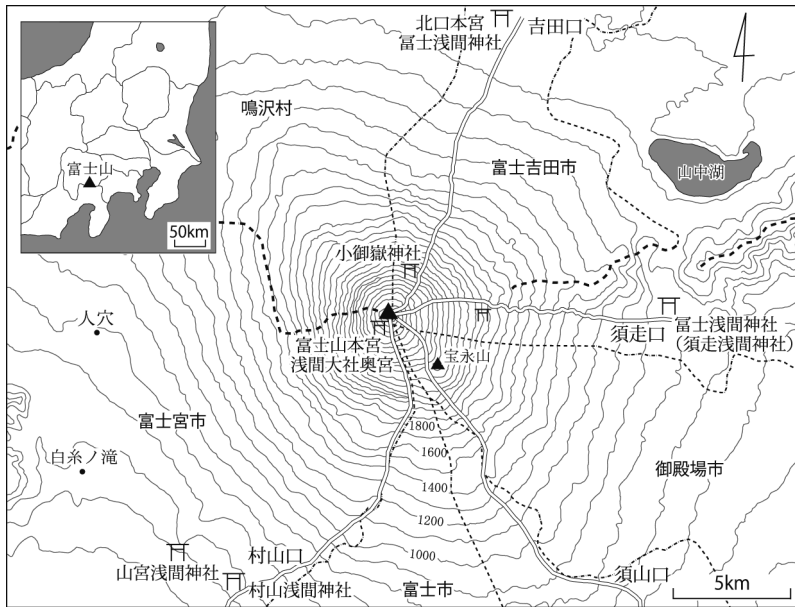


図 2 研究対象地域.

Fig. 2 Study area.

た例は枚挙に暇がなく、一例をあげると『東都歳時記』（1838（天保9）年）には、元旦に仰ぎ見る富士山を江戸では「初富士」と呼んだことが記されている。

18世紀中期から19世紀にかけて、富士山に対する信仰は一種の社会運動としての性格も有していた。富士講を組織して富士山に代参する一大ブームともいべき現象が江戸市中で生じ、政治批判を恐れた江戸幕府はこの時代、富士講に対してたびたび禁止令を出している。このように富士登拝は宗教現象であるとともに、旅としてのレクリエーション機能、さらには社会運動としての側面も有していたことがわかる。

富士山は江戸から望見可能であるため、人びとが日ごろから富士山に対する親しみをもち、崇敬心が生まれていたことは想像に難くない。しかしながら、こうした富士山への親しみや憧れだけで、18世紀中期以降における爆発的な富士登拝の興隆を説明することはできない。

そこで本稿では、このような富士山のもつ聖性および、聖なる山として富士登拝の旅をする民

衆、その旅をプロデュースする御師（宗教者）に注目しつつ、近世期の富士信仰における登拝とツーリズムとのかかわりを考察することを目的とする。江戸時代における寺社参詣の旅が遊山を含むツーリズム的側面を有していたことは広く知られている（例えば、新城，1982；地方史研究協議会，1999；原，2007，2011，2013；鎌田，2013など）。参詣寺社の組み合わせや参詣ルートを選択といった旅のあり方や様態、旅に欠かせない宿屋や案内書出版などの情報・サービス業の発達、交通便利性の向上、庶民の生活水準の向上など、参詣の旅とツーリズムは混然一体となって展開されていた。富士山もまた例外ではなく、旅にツーリズムの要素を含むものであったが、一方で日本一の高山であり、その行程は危険な旅でもあった。

なお本稿では、団体参詣が盛んになった18世紀半ばから19世紀における江戸およびその周辺地域の富士講の活動を対象とする。富士山には、12世紀に最初に開かれた駿河側の村山口や南東麓の須山口、東麓の須走口など多くの登拝口があり、それぞれ御師集落が形成されていた（図2）。

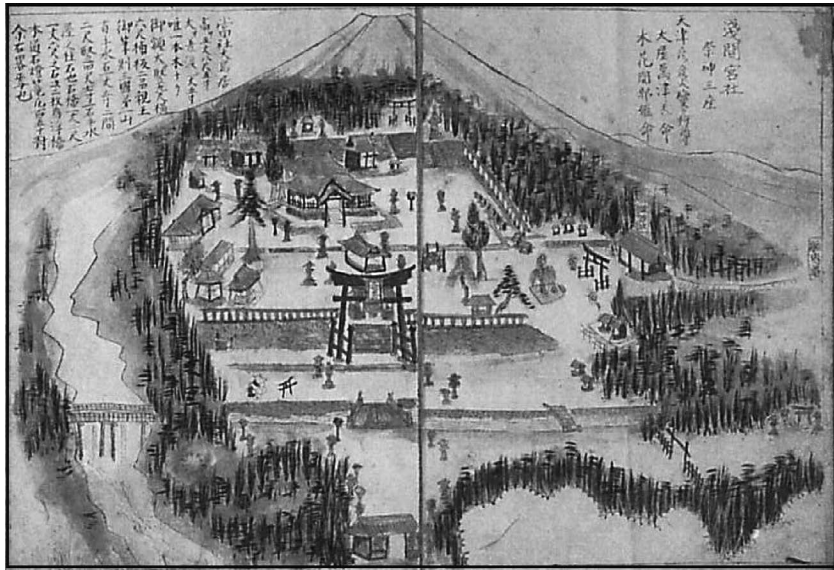


図3 北口本宮富士浅間神社. 富士吉田市歴史民俗博物館編, 2006より.

Fig. 3 Kitaguchi-Hongu-Fuji-Sengen shrine. Source: Fujiyoshida City Museum (2006).

江戸および関東地方の講中の多くは上吉田（甲斐国都留郡上吉田村；現・山梨県富士吉田市）の御師と師檀関係を結んでいたことから江戸市民と関わりの深い上吉田の御師集落を事例とする。

上吉田の集落には、河口湖の対岸に位置する川口集落とともに富士山北側の登拝口として、19世紀初頭の文化・文政期には86軒の御師住宅が建ち並び、富士山登拝者で殷賑を極めた。上吉田は富士山の吉田口（北口）として、古から大勢の道者（講中）が訪れた登山拠点であり、道者に住宅を開放して宿泊や登拝の世話をする御師が集住する宿場町として栄えた。江戸時代の地誌書『甲斐国誌』には当時の御師の暮らしも描かれており、登拝者らは御師宅に到着すると、山役金を差し出して潔斎を行い、山入りの装束を整えた（富士吉田市歴史民俗博物館, 2005）。

富士山頂に至る登山道の起点となるのが富士北口本宮富士浅間神社である（図3）。浅間神社が立地する諏訪森は浅間神社勧請以前から諏訪明神が祀られていた。古来富士山を遥拝する場所であり、現在の大鳥居も富士山の鳥居とされた。縁起によると781（天応元）年の富士山噴火の後に、

富士山を遥拝するこの地に当時の甲斐国主が社殿を建立したという。浅間神社の祭りとして、鎮火祭（吉田の火祭り）はよく知られている。現在は8月26・27日の両日に行われている。富士登拝の山仕舞いの祭礼であり、参詣者や観光客でにぎわう。

周知のように近世期の富士信仰に関しては、歴史学や民俗学などの分野で豊富な研究蓄積がみられる。本稿では井野邊茂雄、岩科小一郎、遠藤秀男、西海賢二、原淳一郎ら斯学の研究をもとに、富士吉田市史や富士吉田市歴史民俗博物館（現・ふじさんミュージアム）の資料を手がかりに宗教ツーリズムの視点から検討する。

II. 富士信仰の祖型と展開

1) 神奈備^{かむなび}と遥拝

富士山に対する信仰の成立は定かではないが、縄文時代中期の静岡県富士宮市（千居遺跡）や山梨県都留市（牛石遺跡）の配石遺構には富士山遥拝を意識した様子がうかがわれるという（鈴木, 2015）。

文献上では遅くとも8世紀には富士山信仰に

かかわる描写を見いだすことができる。『常陸国風土記』において筑波山と対比的に描かれる「冷たく氷と雪に閉ざされた」富士山（神）のイメージは、当時から美しい姿でありながら人を寄せつけない孤高の存在として、崇敬と同時に畏怖されていた富士山の様子を想起させる。古代から富士山は特別な存在であった。万葉集に詠まれている山辺赤人による長歌とその反歌からも、天地創造の御代から富士山がご神体そのものとして崇拝されていたことがうかがえる²⁾。

コニーデ型の美しい山容をもつ孤峰・富士山は、その火山活動により畏敬の念をもって崇拝され、鎮火への祈りのために^{あさまのおおかみ}浅間大神の名が冠せられ祠堂が創建された。8世紀末から11世紀末にかけて富士山は『続日本紀』や『日本紀略』などの史書に残るだけで9回の噴火をみており、なかでも864（貞観6）年の噴火では溶岩流が北麓に流れ甲斐国には甚大な被害が生じた。『日本三代実録』には、浅間明神が郡司に憑依して、災害を引き起こした旨をのべ、貞観大噴火の火口を臨み溶岩流を拝める場所に浅間社³⁾が建てられ官社に列せられたことが記載されている。浅間大神はこの時期朝廷により3度の位階昇叙が行われており、天下泰平と富士山の静謐が繰り返し祈願された（遠藤, 1978, 1987）。

このように富士山は、山体そのものに神霊が宿るとする神奈備（神霊が宿る依代）として遥拝・崇敬されていたが、こうした事例は三輪山をはじめ多くの日本の霊山信仰にみられる。古来、麓で生活する人びとにとって山は祖霊の憩う他界の領域であるとともに、農業や生活に欠かせない水や食料、衣類となる動植物などの生活資源の供給地として、その恵みに感謝が捧げられてきた（長野, 1987; 宮家, 1995; 鈴木, 2015 など）。こうした山岳信仰の基本的な性格は富士山においても看取されるが、同時に人びとは雪に閉ざされ、人間を寄せつけない富士山の神秘性と、噴火に象徴される荒々しい力を怖れていた。朝廷もまた自然の猛威を神の偉大な力の顕現とし、祟りを恐れて神位を捧げ鎮めることに奔走していたのであり、浅間大神が国家祭祀の対象であった（鈴木, 2015）。

2) 富士登拝の成立

富士信仰の核となる原型が豊富な水の恵みへの期待と噴火への畏怖にある一方で、平安時代ははじめになると当時の富士山信仰の様子について文献資料からうかがい知ることができる。なかでも^{みよこよしか}都良香（834～879）は『富士山記』において当時の富士信仰の様子を詳細に記録している。ここでは当時の祭祀の様子や、具体的な山頂の景観⁴⁾、残雪、噴火の状況などが生き生きと描かれている。ここでも『日本霊異記』と同様に、^{えんのおつめ}役小角（役行者）が富士山に登拝したことが記載されているものの、伝説の域を出ない。

鈴木（1978）は、特定の山が信仰対象となる自然条件として、(1) 山麓に鬱蒼とした樹木が茂り、山の形姿・地形に特色があり、周辺の山と比較して目立つ存在であること、(2) さらに修験道の山となるのは、山中に岩石があり、洞穴や滝壺があつて参籠に適するとともに、(3) 長距離の^{とせう}抖擻（徒歩による修業）が可能な地形をもつこと、の3点を指摘する。そのうえで中部地方において最初に山岳修行の道場として開かれたのが富士山であると推測している。

富士山への登拝が確認されるのは、噴火が小康状態になった12世紀以降のことである。火山活動の鎮静化により、遥拝の対象であった富士山が登拝対象となり、本地垂迹思想の影響を受けて浅間大神は大日如来を本地仏とした富士浅間大菩薩となった。

富士山登拝の行者として文献上、登頂を最初に確認できる人物が^{まつだい}末代上人である。富士山に初登頂したのが1132（長承元）年（『浅間大菩薩縁起』）のことであり、生涯に数百度も登山した末代は、その後1149（久安5）年には山頂に大日寺を創建し、富士上人として知られた（『本朝世紀』）。鎌倉時代・臨済宗の僧侶であった^{こかんしれん}虎関師錬も富士登山の記録が残されている。34歳（1311（応長元）年）に師錬が登山した時の記述によれば、当時の登拝者が山頂近くの泉で^{みず}禊（水垢離）をしてから山頂に立ったこと、また登拝の案内人（導者）がいたことがわかる（富士吉田市史編さん委員会, 2000）。このことから少なくとも鎌倉時代には、

導者による富士山登拝が行われていたことがわかる。

富士信仰の拡大過程について、奉納された仏像や経典などの遺物から推測すると、14世紀には近隣の駿河、相模の二国からの奉納者の記録が残されている。15世紀になると上総、下野、常陸、尾張の住人からの奉納もあり、時代を降るにしたがって次第に信仰圏が拡大していった様子が推察される。

3) 修験道の展開

中世には本地垂迹思想の展開により、富士山の本地は大日如来、垂迹は浅間大菩薩とされた。末代人は富士山南麓の村山（現・富士宮市）に伽藍を建立し、富士山興法寺で即身成仏したとされる（鈴木, 2015）。その後、村山は富士修験の拠点として栄え、修験者らによる富士登山が広がった。村山を拠点にし、富士山域を回峰する富士峰修行が行われた。

このように中世期には、修験者による修業の場として富士登拝が浸透していったが、この時代に庶民による富士山登拝は一般化してはいなかった。富士信仰のあり方に大きな影響を与えたのが長谷川角行（1541～1646）である。角行は富士の人穴（富士宮）や北口本宮参道の立行石（上吉田）などで荒行を行い、衆生済度を志した。また1573（天正元）年の琵琶湖での百日水行をはじめとして、各地で水行による験力を得て、その験力による病氣治癒の力により江戸で多くの信徒を獲得した。106歳で亡くなるまで生涯を難行苦行に捧げたという伝説の行者であり、死後に靈神とされ、のちに江戸の富士講が隆盛を迎えると開祖とされた（鈴木, 2015）。

以上、富士信仰の祖型と展開をみてきたが、そこには日本の山岳に対する信仰と共通する要素を見いだすことができる。例えば、「水の恵みの山」「祖霊の憩う山」「噴火する荒々しい怒りの山」「験力を得る修行の場としての山」などである。これらの信仰は時代とともに重層化し、多様な形態としてあらわれるようになったと考えられる。

III. 富士講の成立と登拝の大衆化

1) 富士講の成立と組織

江戸時代の富士山信仰においてもっとも特徴的な動きは富士講の爆発的な流行である。先述したように富士講の淵源は、中世末期以降の富士行者にさかのぼることが可能である。角行の法脈を継いだ村上光清（1683～1759）や食行身祿（1671～1733）らの行者によって教えが広められ、とくに1733（享保18）年に身祿が富士山で入定したことを契機として、江戸市中や関東地方周辺で信仰が広まったとされる（大高, 2013）。古代・中世期における富士信仰が修験者の験力獲得のための行場という性格を強く有しており、富士山への登拝目的は宗教的な修行を通して行者になることであった。近世期になると、宗教者以外の一般の人びとが比較的自由に参拝できるようになったことで、各地に代参講⁵⁾が組織されていった（西海, 2011）。

代参講の組織は講元・先達・世話人（三役）および講員からなる。講元は講の代表者であり、世話人とともに講の運営を担った。世話人の数は講の規模によって異なるが、大規模な講では多くの世話人が置かれ、講元を補佐して講員の勧誘や講金の集金にあたった。参詣の周期は講員の人数や経済力に応じて講によって異なるが、3年、5年、10年といった具合に各講で周期を決め、講員が期間内に順次交替で富士山に登拝した。全講員が登拝を済ませると収支決算のうえ一期を終了し、新規の講を開始した。講金は一人分の登山費用を講期間中、月割で納めた。講金には御師や登山室、茶屋・宿屋などへの支払や寄付、さらには経常費用も必要とされるので、庶民にとって講費負担は安いものではなかったという（岩科, 1979）。

講の宗教的指導者が先達である。先達は登山時のリーダー役も務めるため、加持祈祷において神秘的な靈験を示す宗教的カリスマであるとともに人望のあることが期待された。富士講に限らず修験系の講中の場合、指導者である先達の験力と人柄は講員を勧誘するうえできわめて重要な要素であった。先達の交代が講の消長を左右すると

日)より群集する。駒込(境内見世物承認出, 道すがら幟提灯多く出す)。浅草砂利場(当所わけ参詣人多し)。深川八幡境内…(以下略)などと記され, 当時の富士塚をめぐる習俗がうかがえる(岩科, 1978b)。図6と図7は駒込・富士浅間神社の境内(図6)および同社の6月朔日の山開きの日の様子(図7)を描いたものである。山開きの際には, 前夜より多くの参詣者が集い賑やかであった様子がうかがえる。『江戸名所図会』には土産品として麦藁細工の蛇, 団扇, 五色の網などが売られていたと書かれており, 江戸に勧請された浅間神社にも縁日に参拝する人が多かったことがわかる。

先述したように近世期の富士山登山口のおもなものとして, 北麓の吉田口のほか, 南麓の須走口, 須山口, 大宮村山口などがあったが(図2), なかでも吉田口がもっとも繁栄していた。江戸からの富士講員は, 甲州道中から大月を経て富士道(駿豆州往還)を上吉田に入り, 登拝後は鎌倉往還を須走に出て, 足柄峠を越えて大山に詣でた後に江戸へ帰るのが基本ルートであった(富士吉田市史編さん委員会, 2001)。

富士吉田口からの登拝の場合, 何合目といわれる登山ポイントには必ず神仏を祀る拝所が設けら

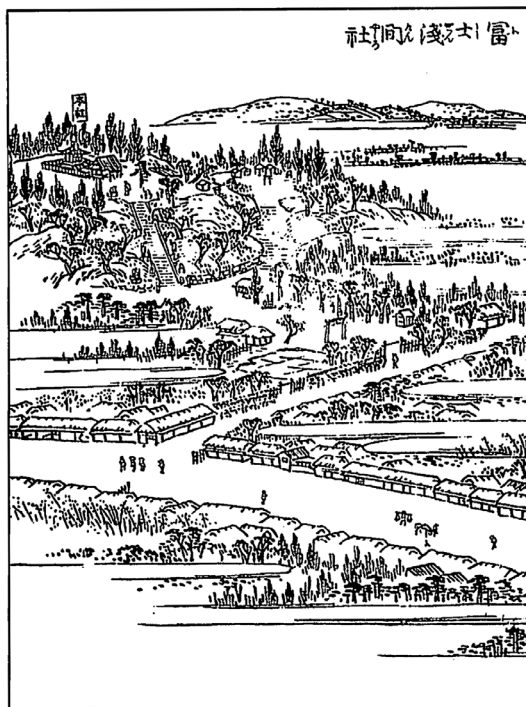


図6 富士浅間神社(駒込) (『江戸名所図会 卷之五』より)。

Fig. 6 Fuji-Sengen shrine in Komagome. Source: Edo Meisho Zue, Vol. 5.



図7 六月朔日, 富士詣での様子 (『江戸名所図会 卷之五』より)。

Fig. 7 Landscape of Fuji shrine when visiting on the opening day, June 1st. Source: Edo Meisho Zue, Vol. 5.

れ、登拝者はこれらを拝しながら仏界とされる山頂を目指した。信仰登山は上吉田の御師によって支えられており、檀家のみならず一般の登山者に対しても、登山前の禊、支度、荷物の運搬や案内役となる強力ちからの手配などを行ったほか、人足を動員して登山道の整備にあたりるとともに、山小屋における傷病者の救護など、富士登山に際して欠かすことのできない存在であった（富士吉田市史編さん委員会, 1999）。

ここで江戸市中において組織されていた講の事例をみてみよう。食身禄の直弟子たちが富士講を隆盛に導いていくが、とりわけ江戸市中には数多くの講が組織された。その一つである丸藤講（牛込）の富士登拝は以下の通りであった（岩科, 1987）。江戸からの富士山登拝は、道中往復で7泊8日の行程であった。内藤新宿を出発し、初日は八王子に泊まり、2日目は小仏峠を超えて猿橋泊、3日目に上吉田の御師宅に宿泊した。翌日富士山の山小屋で仮眠し頂上で御来光を仰ぎ、駿河側の須走に降り竹之下で宿泊（5日目）、翌日は足柄峠を越えて道了尊（大雄山最乗寺）を往復し、蓑毛（秦野）に宿泊した。翌日、相模大山（石尊）に参り、その後大山街道を江戸に帰る組とさらに東海道へ出て、江の島・鎌倉を周遊する組とに分かれたという。

江戸時代における富士山道中地図として知られる『富士山道道知留辺』（1860（万延元）年刊行）によれば、江戸からの講中はおおむね甲州街道を高井戸、府中、八王子と通り、吉田の御師宅に宿泊し、1泊の行程で富士登拝をした後、駿河の須走口に下山し、帰路に道了尊（足柄）や大山石尊を詣でて帰るというルートが標準的であった。房総半島からは船で平塚宿へ出るルートや、北関東からは八王子宿を目指して進むルートがみられた（岩科, 1983）。後述するように18世紀半ば以降になると、富士山と大山の両方をセットで参詣する人びとが急増するという（西海, 2008）。

富士講は江戸を中心とする関東地方でおもに組織されていたが、関東地方以外に組織された富士講の活動内容について、大和国添上郡石内村（現・奈良市）の講中の事例をあげる¹⁰。石内村

の講中は富士登拝の記録を残した『富士山道中入用帳』のうち1814（文化11）年と1873（明治6）年のものが残されている。代参の期間は20年に1度であり、この頻度は大正時代まで続いた。1814年の登拝では、先達5人を含む総勢41人で6月8日に出発している。関宿から東海道の入り、火防の神である遠州秋葉山に詣で、吉原宿から愛鷹山あしたかを廻り、富士山南口・須山の御師宅に10日あまりで到着している。富士山頂を超えて上吉田の御師宅に泊まり、甲府、上諏訪、木曾街道を経て6月27日に帰村している。西日本からの登拝は、おもに駿河側からの登拝ルートであった。

富士講のおのおのの講中は登山参詣を目的としていたものの、富士山中では先達にしたがって宗教儀礼がなされるとともに、講中の成員の登拝経験などに基づいてバリエーションもみられた。大高（2013）は富士山巡礼のバリエーションとして、以下の3つをあげている。

(1) お鉢めぐり：富士山頂の噴火口周囲を時計回りにまわるおよそ3kmの行程である。神仏分離以前には、山頂部には、賽河原さいのかわら・初穂内場はつほううちば・金明水きんめいすい・銀明水・表大日・親不知・子不知・裏薬師などの名所を経るものであった。

(2) 御中道めぐり：富士山頂へ直接登拝するのではなく、植生限界とされる標高2,100～2,800m付近の斜面を横断して一周するものである。富士講においては山頂への登山参詣よりも大行とされ、三度以上の登山参詣を果たしたものにしか許されなかったという。巡礼路は富士山の幾筋もの沢を横切るために年代によっても変遷が大きい。現在は崩壊箇所も多くこのルートでの巡礼はできない。

(3) 八海めぐり：富士山登拝に先立って角行が修業した足跡を参拝するものである。その行程においてとくに「八海」と呼ばれた湖水にて禊を行うものである。富士山周辺の湧水群・忍野八海をめぐる「元八海」、富士五湖を含む8つの湖水をめぐる「内八海」が知られるが、琵琶湖、二見ヶ浦、芦ノ湖、諏訪湖、中禅寺湖、榛名湖、霞ヶ浦など富士山の位置する駿河国・甲斐国を超えた広域に点在する「外八海」めぐりは特例とされた。



図 8 元八湖再興図. 富士吉田市歴史民俗博物館, 2003 より.

Fig. 8 Map showing eight springs of Mt. Fuji. Source: Fujiyoshida City Museum (2003).

図 8 は元八湖の再興図である。元八湖は忍野村にある出口池、御釜池、底抜池、銚子池、湧池、濁池、鏡池、菖蒲池の 8 つの池を指す。八台竜王が祀られる富士講の巡拝地であり、江戸時代の後期に頽廃していた古跡の霊場を再興（1843（天保 14）年）したものであった。このようなバリエーションが生み出す信仰の多様性は富士登拝による宗教体験を高めるものであると同時に、登拝を重ねていくことの動機づけともなったと考えられる。

近世期までの登山は基本的に信仰登山であったが、明治維新を契機として富士登拝に大きな変化があらわれた。すなわち信仰登山から観光登山への流れである。信仰登山の変化における宗教的な側面として、神仏分離令（1868（明治元）年）の発令およびその後の国家神道体制の確立を指摘することができる（富士吉田市史編さん委員会, 1999）。太政官布告による神仏分離令により全国各地で仏教に関わる多くの信仰対象が棄却されたことが知られているが、富士山も例外ではなく、例えば女人禁制の解除といった登拝に関わる信仰儀礼やしきたりに変化が生じた。その結果、御師との関係

をもたない登山者の増加がもたらされた。1871（明治 4）年には御師職が廃止され、御師がそれまで有していた山役銭の徴収や山内管理に関わる権限、旅行時の伝馬使用権などの特別な権限を失うこととなった。

20 世紀初頭になると従来の信仰登山に代わって、頂上への到達や山内散策自体を目的とする近代登山（アルピニズム）が勃興するようになった。1902（明治 35）年には国有鉄道中央本線が大月駅まで開通し、同駅で馬車鉄道を介して東京と上吉田が結ばれると、富士山は信仰の山から近代登山の山へと変貌を遂げていくことになる。

IV. 御師町の景観と信仰圏

1) 信仰集落の成立

御師の勤めは大別して、(1) 富士登山参詣人に対する清め祓いや祈祷・神楽奉納など宗教的儀礼の執行と登山の世話、(2) 旦家所在の村々を廻り、富士山牛玉札こおうみだや旦家の依頼を受けて行う祈願・祈祷の配札、(3) 浅間神社や山内諸社、山小屋を含めて信仰対象である富士山北口の維持・管理、の 3 つがあげられる（富士吉田市史編さん

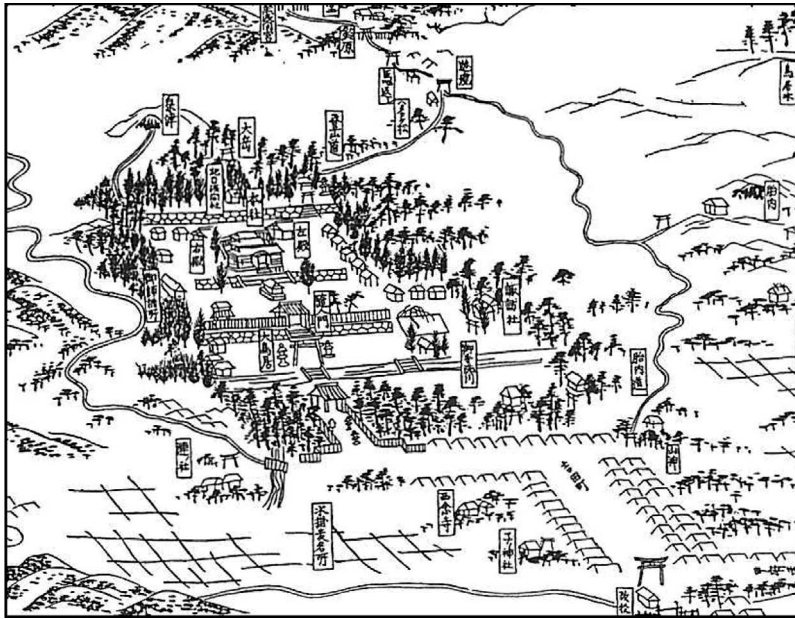


図9 上吉田の町並の様子(17世紀初頭)〔「富士山神宮麓八海略絵図」部分〕。富士吉田市史編さん委員会、2000による。

Fig. 9 Landscape of Kamiyoshida in the early 17th century. Source: Fujiyoshida City, 2000.

委員会、2001)。このように御師の働きは多岐にわたるが、参詣者を浅間神社へ案内するとともに、富士禅定(山頂登拝)にあたって宗教的指導者であり、宿坊の役割を兼ねていたことがわかる。先述したように、鎌倉時代末には富士登拝者を山頂まで案内する導者がいたことが推測されるが、遠藤(1978)によれば、富士山を修業の場として、宗教者以外の一般人が自ら参加し霊力を得ようとする「富士行」は、村山修験の修験者・頼尊によって文明年間(1317～1319)にはじめられたもので、庶民による富士登拝興隆の端緒になったという。当時から村山が富士信仰の拠点であり、修行者以外にも登拝という信仰形態が発生していたことが認められる。

吉田口登山道起点に位置する北口本宮浅間神社(図3)にある富士権現は1233(貞永2)年の創建と伝えられる。登山道は修験者の修行のために設けられたものであるが、富士に参詣する一般の道者が増大するにつれて、登拝者を受け入れる体制が地域の側に構築されるようになる。各登山口

に所在する浅間神社を核として、祈祷や峰入修行を行う修験者が参詣者の指導にあたり、参詣者の宿泊や登拝の世話をする御師が登山口周辺に宿坊を形成し、富士道者を受け入れる体制が少しずつ整えられていった。御師町としての吉田の原形は15世紀半ばには形成されていったものと考えられている(富士吉田市史編さん委員会、1996b, 2000)。

2) 御師町の景観—吉田の町並み—

『妙法寺記』によれば、近世期の富士講参詣者を支えた上吉田の集落は、中世末期の15、16世紀にはすでに成立していた。現存する「吉田宿屋敷割写」や「下宿屋敷地割帳(写)」などにより、上吉田の御師集落は、1572(元亀3)年に城山の西南に隣接した古吉田から現在地に移転し、その後17世紀の中頃までに、計画的な町割によって整備されていったものと考えられている¹¹⁾(伊藤、1978)。図9は「富士山神宮麓八海略絵図」のうち、北口本宮浅間神社境内ならびにその鳥居前を描いたものである。鳥居前には、御師たちが集住

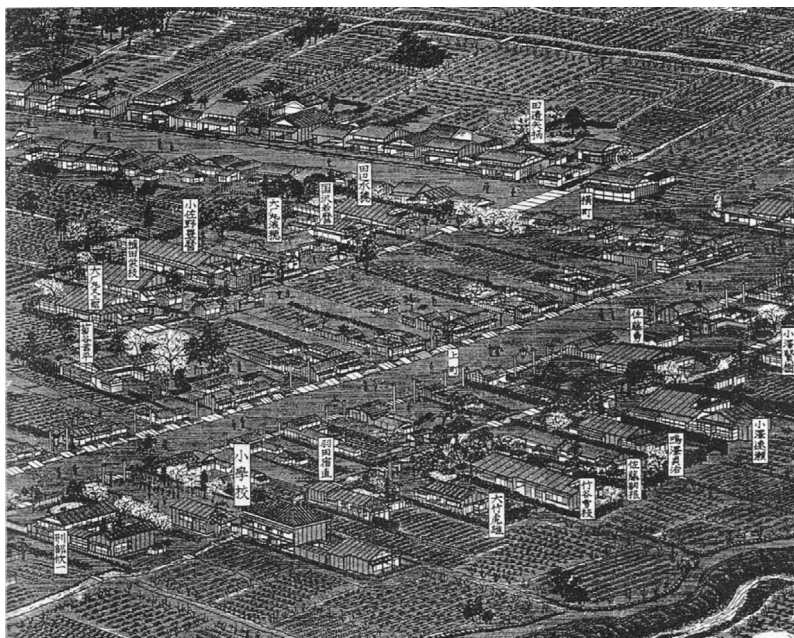


図 10 明治期における上吉田（上宿）の景観（明治 25 年「富士山北口本宮富士嶽神社境内」全図）。富士吉田市史編さん委員会，2000 による。

Fig. 10 Landscape of Kamiyoshida-Kamishuku in the Meiji era. Source: Fujiyoshida City, 2000.

する大規模な町場が形成されており，現在でも近世以前における御師住宅の屋敷遺構が残されている。

「明治 25 年富士山北口本宮富士嶽神社境内全図」（図 10）をみると，短冊形地割で前屋敷・引き込み路をもつ御師屋敷が建ち並んでいる様子がわかる。集落全体は東を間堀川，西を神田堀川に挟まれる形で立地しており，こうした水路や土塁により囲まれた環濠集落に類似した集落形態がとられていた。

図 11 は明治初年の地籍図などをもとに復元された 1572（元亀 3）年の屋敷地割を復元したものである。各屋敷の間口規模をみると東町は平均約 14 間（26 m），西町約 12 間（22 m）と全体的に大規模であった。東町は間口 16 間（29 m）代の屋敷が 7 軒と最多であり，西町と比較して大きな屋敷が多く分布しており，御師家のなかでも経済的に有力な家が東側に集住していたことがわかる。東町角にある西念寺は，御師たちの庇護を

受けた時宗道場であり，この西念寺が町割の基点とされた。道路の両側に集落が建ち並ぶ近世的な町割とは異なり，水路によって隔てられた片側町である東町・西町に同族的集住がみられた。集落移転によって形成された近世上吉田の御師集落の景観的特徴として，富士吉田市史編さん委員会（2000）では，（1）鎌倉街道付け替えによる富士山を望むヴィスタの形成，（2）西念寺を中心とした寺院群の計画的配置，（3）下吉田までを含む広域的な宿町住民の再編成，（4）御師家の新屋敷への集住を短冊形地割のもとで成立させたことが指摘されている。こうした寺院勢力の再編成も含めた町場の再構築によって，近世期以降における上吉田御師集落の繁栄の礎が築かれたといえるだろう。

具体的な屋敷利用の例として，御師住宅の屋敷構成を検討する。図 12 は，近世期・上吉田の御師住宅として国の重要文化財に指定されている小佐野家の屋敷内構成（1861 年）を示したもの

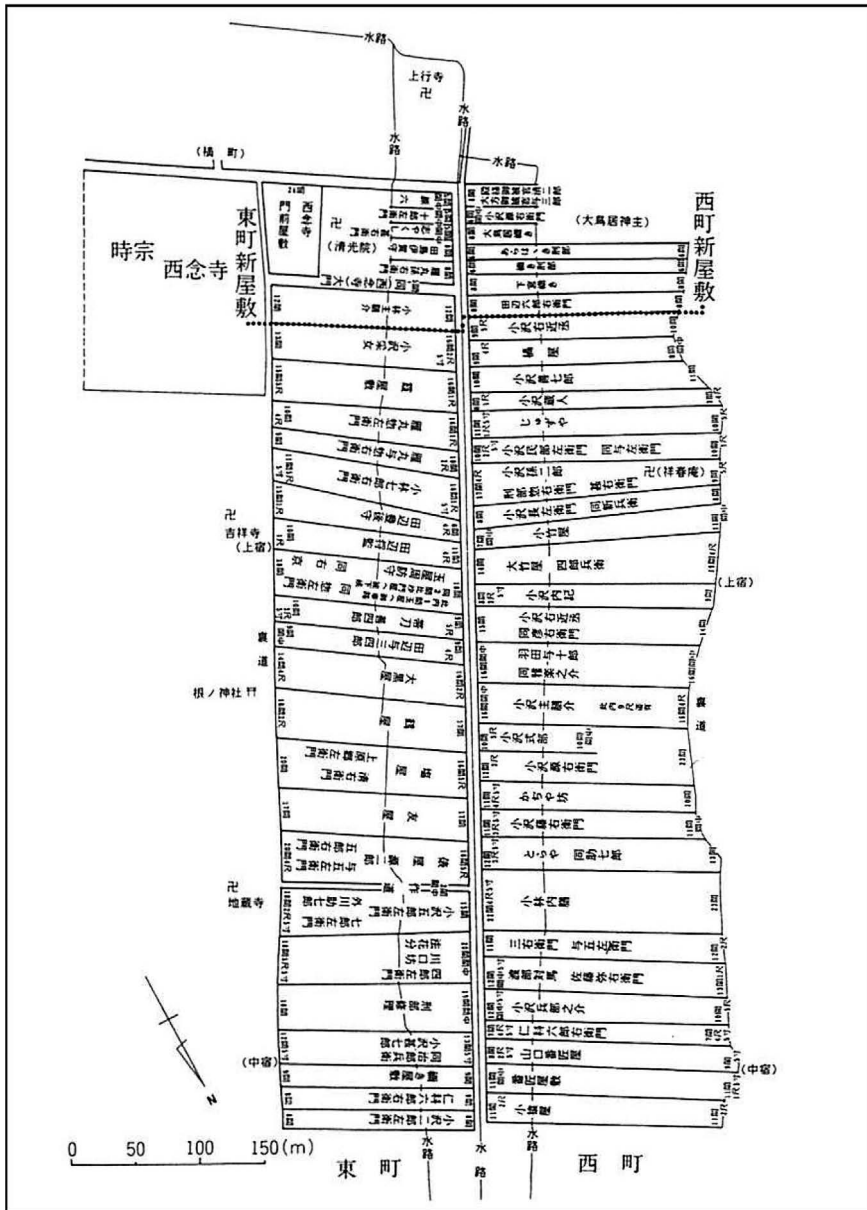


図 11 上吉田集落の町割 (1572 年). 富士吉田市史編さん委員会, 2000 による.

Fig. 11 Land use at Kamiyoshida settlement in 1572. Source: Fujiyoshida City, 2000.

である。道路に面して 8 間 4 尺 (約 16 m), 奥行 76 間 8 尺 (約 141 m) という大区画の短冊形地割を呈している。表通りに面して奥行 30 間 (約 55 m) ほどの前屋敷が並び、引き込み路が設けられた奥に敷地 (主屋) の入口が設けられている。

本宅には主屋のほか、土蔵や廁がみえる。敷地には表門と裏門が配置されており、裏地 (耕地) には稲荷大明神が祀られている。敷地の前・裏には水路が流れている。このように小佐野家の屋敷構成からは、前屋敷・本宅・裏地という三区分の敷

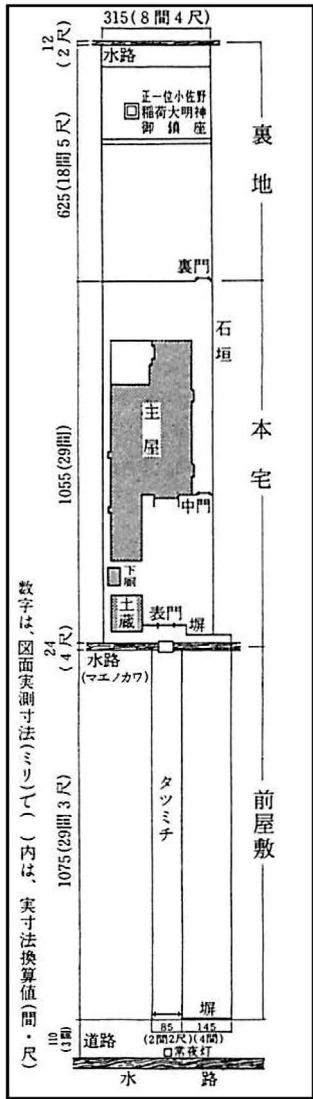


図 12 御師住宅の屋敷内構成例. 富士吉田市史編さん委員会, 2000 による.

Fig. 12 Example of house layout of *oshi* (religious priest) at Kamiyoshida. Source: Fujiyoshida City, 2000.

地利用がなされていることがわかる。図 13 は同家における主屋の間取りを示したものである。主屋は間口 6 間半、奥行 8 間半で、裏手には御神前、ゴナイジンなどの部屋が 4 間分張り出している。この部分が講員用の部屋として利用された。屋根はトタン葺であり、切妻妻入型の御師

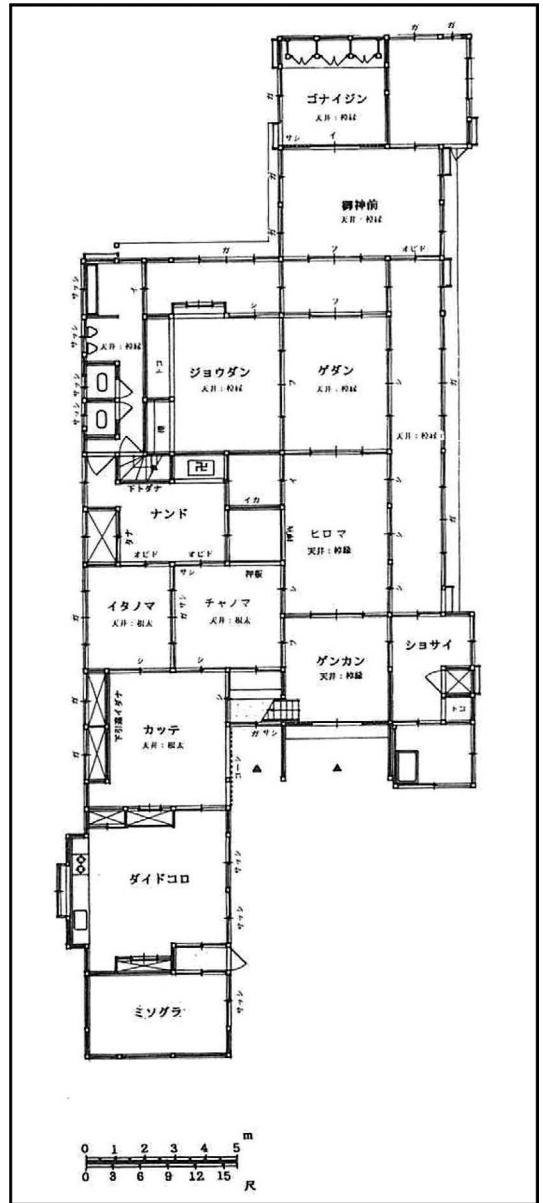


図 13 御師住宅の主屋間取り例. 富士吉田市史編さん委員会, 1996a による.

Fig. 13 Example of layout of main house of *oshi* at Kamiyoshida. Source: Fujiyoshida City, 1996a.

住宅である。上手側に表からゲンカン、ヒロマ、ゲダンと続き、ゲダンの下手側に床の間のついたジヨウダンがある。下手側の部屋は家人の生活空間であった (富士吉田市史編さん委員会, 1996a)。

こうした大規模な短冊型地割で前屋敷・引き込み路をもつ屋敷構成は、ほかの富士山登山口の御師集落と比較しても特徴的であり、とくに規模の大きさは上吉田の景観の特徴といえる。

3) 檀那場と信仰圏

富士講の分布の手がかりとなる資料として、「紙本着色富士講惣印図」がある（富士吉田市史編さん委員会, 2001）。田端村の丸長講作成によるもので、1842（天保13）年に江戸百八講として描かれている。この資料によると江戸には下町地区を中心に107講の分布が確認され、江戸以外には武蔵8、相模3、上総2、下総1、上野1の計15講が描かれている。ここで描かれている講は、基本的に元講（先達によって創始された講）および元講的な役割を果たしていた枝講（元講から分かれて結成された講）であり、この時期の富士講の大まかな分布が読みとれる。

「惣御師持旦家取調帳」（1867（慶応3）年）から、吉田口御師の旦家範囲を推察すると、関東一円および奥羽（磐城・岩代・羽前）、伊豆、駿河、尾張の範囲に広がっていた（富士吉田市史編さん委員会, 2001）。配札御師数をみると、武蔵50人、相模24人、郡内22人、江戸21人の順であり、御師数が多い武州や相州では旦那場が細分化され、御師一人あたりの担当村数は多くて30か村程度であるのに対し、少ない地方では一人の御師が多くのか村を旦那場としていた。旦那場村数はK家の1,106か村が最多であった。図14はK家における旦家分布を示したものである。江戸時代末期の1864（元治元）年「御祈禱姓名録」によると、現在の茨城県（常陸・下総）、栃木県（下野）、群馬県（上野）、埼玉県（武蔵）、千葉県（下総）、東京都（武蔵）、神奈川県（武蔵・相模）、山梨県（甲斐）の1都7県（7か国）にK家の旦家が分布していたことがわかる。

K家の文書¹²⁾から推測すると、文政期（1818～1830）の年間参詣人数は平年で7～8千人、御縁年で約1万5千人であった。講社による登拝のみならず、単独、もしくは一般の少人数グループでの登山者もかなりみられた（富士吉田市史編さん委員会, 2001）。

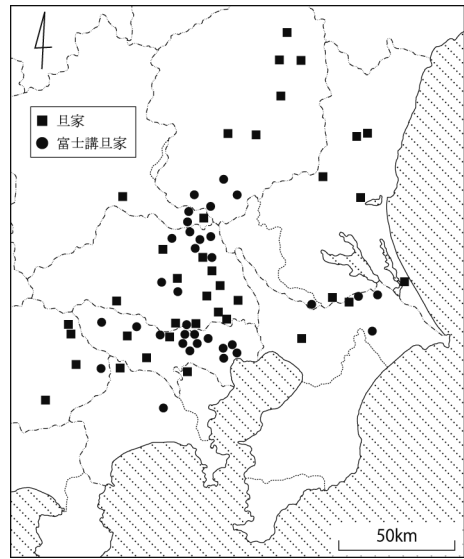


図14 K御師の旦家分布（19世紀末頃）。富士吉田市史編さん委員会, 1999による。

Fig. 14 Distribution of supporters of K oshi in the late 19th century. Source: Fujiyoshida City, 1999.

このように御師たちは浅間神社へ参詣者を案内し、登拝者に対しての宗教的、また実践的な登山指導を行うとともに、自宅を参詣者の宿所として開放する宿坊の役割を担っていた。御師と登拝者との関係は、御師を師とし登拝者を檀那（旦家）とする師檀関係を結んでおり、檀那の居住地を檀那所と称したが（富士吉田市史編さん委員会, 1999）、信仰圏は関東一円を中心に北は奥州、西は尾張まで及んでいたことがわかる。

V. 富士信仰と宗教ツーリズム

1) 富士山信仰圏とツーリズム

II章で検討したように、富士信仰の祖型には日本の山岳に対する信仰と共通する要素が抽出された。古来、日本人は山岳に神聖性を抱いてきたが、それは山自体が神として崇められ、神々や祖霊の居住地として、また宗教者の修行場として山が人々の間で信仰されてきたからにはほかならない。もともと精緻な信仰体系や教義を有さない山岳信仰は、山容を眺望できる山麓居住者の信仰対象として、崇敬されたものであり、各山岳信仰に

おける第一次信仰圏の範囲は、いずれもこの山岳周辺域を示している。遥拝可能で徒歩一日圏内に位置する第一次信仰圏では、水を支配し、作物の豊凶を占う農耕神としての性格が顕著であり、あわせて祖霊の憩う地でもある。信仰は、共同体の社会組織と結合し、社会的な通過儀礼としても利用される。この第一次信仰圏にみられる信仰形態は、日本におけるアルカイック（祖型的）な信仰の表出したものであり、多くの里山でみられる普遍的な信仰形態であると考えられる（松井、2003）。一方で標高が高く、山容秀麗にして独立峰であるとともに望見地域（後背地）が広い富士山では、近隣の徒歩一日圏を超えた地域からも遥拝が可能である。そこで富士山の威容に対する崇敬や憧れは、一般的な山岳信仰の第一次信仰圏を超える広範囲の人びとに受容されたものと考えられる。

山岳信仰における第二次信仰圏の成立には、信仰の普及伝播者（御師）の果たす役割が大きいことが知られている。御師の配札活動に依拠した代参講が組織され、山岳はその霊験を基盤としたご利益によって、直接眺望することができない地域の人々と結合する。山岳との直接的な関係は薄れるものの、集落の社会組織を離れ、信仰を媒介とする組織が生まれ、定期的な参拝が営まれるが、江戸やその周辺地域は富士山信仰圏における第二次信仰圏の核心部分に相当する。代参講が組織され周期的な参拝がなされるとともに、富士山を遥拝することが可能な地域でもある。こうした富士山の高さ、美しさ、雪にとざされた峻厳さといった視覚的イメージにより、遠隔地にありながら人びとは直接に聖性を体感することができる。この点で富士信仰における第二次信仰圏は他の山岳信仰とは異なる様態を示しているものと考えられる。

こうした信仰特性は富士塚にも看取される。山岳から遠隔地に位置する地域では、定期的な参拝が困難となり、聖地の代替物（分霊、模擬山、太刀など）への参拝や勧請といった宗教行動が生じてくることが知られている。富士塚は模擬山として、高齢者や女性、病身などにより富士山に登拝できない人びとの代替機能を有しているが、同時に「山開き」における富士塚登拝や七浅間めぐり

といった儀礼から、富士に登ることへの強い希求を読みとることができる。

このように富士山は江戸や江戸近郊の人びとにとって、「親しみと崇敬を抱く身近でローカルな山」というイメージと、登ることに対する憧れと期待、さらに実際に登ることによって得られる達成感や身体的カタルシス等が相まって、特別な意味をもつ山として信仰の旅が再生産されてきたものと解釈できよう。

2) 複合化される聖地

江戸の人びとにとって、富士講は信仰登山を目的とする宗教組織であったが、信仰の旅には遊山の性格も見いだされるようになる。

ツーリズム的要素の伸張として、「信仰の複合化」および「円環化」の現象（原、2007）を指摘できる。すなわち富士登拝と大山（石尊寺）や道了尊の参詣を一度の機会に行い、往路と復路を円環的ルートでめぐることが顕著になっていることである。西海（2008）は、近世期に書かれた文芸作品を題材に大山登山と富士登山のセット化ともいべき現象が19世紀初頭にはすでに一般的になっていたことを指摘している。例えば『大山廻富士詣』（1822（文政5）年刊行）には、江戸から東海道を經由して、小田原宿・足柄峠を越えて、須走口から富士山頂に登り、再び小田原宿に戻り大山を経て伊勢原・藤沢とめぐる道中案内記が示されており、富士山と大山を一連のセットとして参詣が組み合わされていたことがわかる。同様に幕府による1805（文化2）年の「御触留」にも「駿州富士山並相州大山参詣の者共…」という記述があり、こうした認識は幕府にも共有されていたことがうかがえる。

西海は、富士山と大山をあわせて参詣する（掛け越し）が18世紀半ば以降に増加した理由として、以下の2点を指摘している。第一に富士山噴火に伴う自然災害、とくに東口登山道にある須走（御師集落）への打撃である。宝永の大噴火（1707年11月23日）では、火山岩や火山灰が噴出し、駿河国東部から相模国西部にかけて大きな被害を受けた。須走の御師たちは復興のため参詣者増加のために積極的な参詣者誘致を行った点

表 1 日記・紀行文にみる富士・大山周辺遊覧の記録。

Table 1 Records of trips around Mt. Fuji and Oyama in diaries and essays.

| 題目 | 年代 | 行程 | 備考 |
|----------|--------------------|--------------------------------------|----------------------|
| 山東遊覧志 | 安永 8 年 4 月 (1779) | 江戸—箱根—江ノ島—鎌倉—三浦—金沢—江戸 | 箱根湯治目的 |
| 富士大山道中記 | 寛政 元 年 6 月 (1789) | 武蔵国本宿—御嶽山—吉田—富士山—須走—道了尊—大山—江ノ島—鎌倉—江戸 | 坂東札所めぐり 富士大山参詣が中心 |
| 富士禅定道中記 | 文政 11 年 6 月 (1828) | 常陸国—八王子—大山—江ノ島—鎌倉—江戸—常陸国 | 富士登山が目的 |
| 御用留 | 文政 12 年 7 月 (1829) | 福生—吉田—富士山—須走—道了尊—大山—橋本 | 富士登山が主たる目的 |
| 金沢記 | 天保 15 年 7 月 (1844) | 相模国雨坪村—糞毛—大山—鎌倉—金沢—鎌倉—藤沢—平塚—雨坪村 | 大山より江ノ島 |
| 富士山道中日記覚 | 嘉永 6 年 7 月 (1853) | 下総国大谷口村—高尾山—吉田—富士山—須走—大山—藤沢—川崎大師—江戸 | 富士参詣が主目的 |

出典：西海 (2008).

Source: Nishigai (2008).

である。第二に、60 年に 1 度の富士の御縁年 (1740 年) による集団参詣である。食行身禄の入定 (1733 年) 後、江戸市中で富士講が活発に組織されたこともあり、参詣者が激増した。この参詣者の増加はとくに東口の須走口に顕著であり、東口側の御師たちが大山詣とセットにして、登拝を仕掛けていったことが推測される。

3) 禁忌伝承をめぐる場所のポリティクス

こうした安定した参詣者を確保したい宗教者側からの動きについて、禁忌伝承をめぐる場所のポリティクスとして解釈することができる。幕末期の道中案内記として知られる『富士山道知留辺』(1860 年) には、「行者ハ南ニ登リテ北ニ降り、北ニ登リテ南ニ降ルヲ御山ヲ裂クト称シ、(中略) 忌ム事ナリ」という記述がみられる。こうした「山を割る」コースでの登拝を禁忌とする伝承は、東口 (須走口・須山口) に降る (あるいはこちらから登る) ことに関して触れている文献はほとんどみられない (西海, 2008)。北口 (吉田口) と南口 (大宮口) を通るコースを「山を割る」として忌避すると、北口から東口にあたる須走口もしくは須山口に下山することになり、必然的に足柄峠を経由して道了尊および大山に向かうコースを通ることになる。こうした禁忌伝承について、東

口の御師が広宣したものかは史料的に明らかにはされていないものの、登拝者数の盛衰が御師たちの生活に直結していたことを鑑みると、禁忌伝承も御師集落間の駆け引きや、思惑によって流布されていた可能性があるといえるだろう。

禁忌伝承には「山を割る」以外にも、「片参り」(富士山と大山のいずれか片方のみに参詣する行為) を忌むことが知られている。「片参り」禁忌の記載は道中日記に一般的にみられるものではなく、北口を利用する甲州街道ルートでは希薄であるのに対して、東口を利用する東海道もしくは矢倉沢往還沿いのルートでは、片参り禁忌の伝承が多く残されている。西海はこうした事実から、片参り禁忌という伝承が 18 世紀中葉以降の (東口) 御師の積極的な宣伝活動の結果として浸透したものであると解釈している。

表 1 は 18 世紀後半から 19 世紀半ばに書き記された日記・紀行文類にみる富士山および大山、江の島、鎌倉など周辺の寺社等の遊覧にかかわる記録の抜粋である (西海, 2008)。富士山登拝を主目的とする参詣行動にも、道了尊、大山、高尾山、江の島 (弁財天)、川崎大師など往復の途次に他の霊山や寺社詣をする動きが活発化していたことがうかがえる。こうした参詣地の複合化現象

は、富士や大山の御師たちの宣伝や講側のニーズ、日記・名所記など旅を伝えるメディアの存在など、当時の江戸の社会・文化・経済的な状況などを反映して隆盛となっていったものである。

原(2007)は、富士・大山の二か所参詣成立の背景や相互影響について、(1)交通上の地理的關係、(2)参詣時期、(3)旅の貴重性・困難性、(4)一方の名所周辺に集中する名所群、(5)一方の名所にない魅力、(6)伝承、(7)民俗的意義、(8)宗教者の介在、という8点を指摘している。なかでも原は宗教者の介在に注目し、集団によっては富士・大山のセット参詣を禁じるなど、「片参り」伝承の成立背景に潜むポリティクスに言及している。「片参り」忌避と「山を割る」ことの忌避という矛盾した二つの伝承の背後には、吉田御師と須走御師の対立構造および大山御師の介在が想起されるという。

原(2007)の詳細な検討により、参詣地の複合化は富士・大山のみならず、伊勢参りや善光寺など各地で同様の事例がみられること、また富士山麓の各登山口の御師がそれぞれの立場から、大山など近隣の有力寺社との関係を図りながら、自分たちに有利な伝承を流布させていったことがわかる。こうした信仰をめぐる禁忌伝承のポリティクスは、山岳信仰同士や山岳宗教集落(御師集落＝登山口)同士の攻防の歴史の痕跡を伝える遺産であり、近世期における寺社参詣の興隆が参詣者受け入れ地域の側からも積極的に創出されていったことの証左といえよう。

VI. おわりに

以上本稿では、富士山のもつ聖性および、聖なる山として富士登拝の旅をする民衆、その旅をプロデュースする御師(宗教者)に注目しつつ、富士信仰における登拝とツーリズムとのかかわりを考察してきた。本稿で明らかにしたことは以下の通りである。

第一に、富士信仰の祖型として、近世期以前の富士信仰の祖型と歴史的展開について概括した。富士山は他の山岳信仰と同様に神奈備として選擇されるとともに、祖霊の憩う世界の領域であり、

水をもたらす恵みの神、さらには噴火による自然災害をもたらす怒れる神として崇敬されていた。平安時代から鎌倉時代にかけて、登拝の行者による活動が文献上にも現れ、やがて修験道の山として開かれていくことになる。

第二に、江戸時代における富士講の成立と信仰登拝の大衆化の様相について、講組織や信仰の形態、登拝の様子などを検討した。富士講の組織は講元・先達・世話人の三役および講員から構成され、3～10年周期で代参するのが一般的な形態である。江戸から通常、道中往復で7泊8日の行程であり、上吉田の御師が手配を行った。富士登山が主目的であったが開祖角行や身禄ゆかりの聖地をめぐる巡礼や大山など他の霊山とのセット参詣も多くみられた。

第三に、登拝者に宿泊や富士登拝にかかわるサービスを提供する御師集落の景観的特徴について、上吉田を事例に検討した。上吉田の御師集落は富士山麓の御師集落のなかでも大規模であり、短冊形地割で前屋敷・引き込み路に特徴があった。往時には100を超える御師住宅が建ち並び、夏の登拝季節には殷賑を極めた。

第四に、富士信仰と宗教ツーリズムについて、信仰圏の特性と場所のポリティクスの視点から検討した。そこでは江戸市民にとって遠隔地に位置しながらも望見可能な富士山は、身近で親しみのある山であると同時に登ることに対する強い憧れと期待、登ることによって得られる達成感の大きさから特別な意味をもつ山として受容され、信仰の旅が再生産されてきた。そして受け入れ側の御師たちは、富士登拝口間あるいは他の寺社との競合関係および協調関係に基づきさまざまな信仰伝承が生み出され、こうした伝承もまた御師集落の盛衰と関わってきたことを明らかにした。

本稿では、残念ながら明治期以降の富士信仰と旅の変化について論究することはできなかった。富士登拝は明治期以降、大きく変容を遂げていく。生活の近代化や交通機関の発達に伴う登山の非宗教化や、こうした変化をうけた富士山麓(とくに北麓)地域において観光地化が顕著に進展した(山村, 1994; 内藤, 2002; 大谷, 2011)。女人結

界の廃止（1872年）により、女性による団体登山もみられるようになった。また英国大使・オールコックを嚆矢として外国の要人による富士登山も増加した。近代アルピニズムとしての登山の動きは、日本人にも根づいていった（大谷，2011）。同様に富士信仰の流れも多様であり、修験系の動きやその後の教派神道の動きについては言及することができなかった。もって今後の課題としたい。

謝 辞

富士吉田市歴史民俗博物館（現・ふじさんミュージアム）からは多くの資料提供をいただきました。また本稿作成の機会をいただいた地学雑誌編集委員会、ならびに貴重なコメントをいただいた査読者の方々に御礼を申し上げます。製図にあたり、筑波大学技術補佐員の増山泰子氏の助力を得た。記して感謝申し上げます。

注

- 1) 富士講とは、広く富士山に対する信仰全般を行うための講社組織であるが、本稿では江戸時代に、江戸およびその周辺地域で隆盛をみた富士山登拝のための代参講組織を指すこととする。
- 2) 「天地の分れし時ゆ 神さびて 高く貴き駿河なる不尽の高嶺を 天の原振りさけ見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は（以下略）」（万葉集第三巻 0317）
「田子の浦ゆ うち出でてみれば 真白にそ 不尽の高嶺に 雪は降りける」（万葉集第三巻 0318）
- 3) 現在の河口浅間神社であり、864（貞観6）年の富士山大噴火の後に創建された。山梨県神社庁ホームページ（<http://www.yamanashi-jinjacho.or.jp/intro/search/detail/7137> [Cited 2015/11/16]）による。
- 4) 頂上の景観として、「頂上に平地あり。広さ一許里。その頂中央の窪下の体、炊甑のごとし、甑底に神池あり。池中に大石あり。石の体は驚奇にして宛も蹲る虎のごとし」という描写がある（鈴木，2015）。
- 5) 富士講の講社は村講と代参講に分けることができる。村落共同体で組織され、同一の信仰をもった講員の集団で構成員が一定しているのが村講である。これに対して、指導者を中心に構成員を募り定められた期間に全員が交替で登拝する講が代参講である。本稿では代参講を対象とする。
- 6) 本節では岩科（1987）をもとに江戸における富士講の信仰形態について述べる。
- 7) 富士講には、この法会の日取りを名称とするものが多く存在する。例えば牛込十七夜講、高田十三夜講などが該当する。身祿の命日が十七日であるため十七夜講が多い（岩科，1979）。
- 8) 本文中の『江戸名所図会』からの引用は、市子・鈴木（1996，1997）による。

- 9) 高田富士について、『江戸名所図会』には、以下の説明がなされている。「稲荷の宮の後ろにあり。巖石を豊んでその容を模擬す。安永九年庚子に至り成就せしとなり。この地に住める富士山の先達達藤四郎といへる者、これを企てたりといふ。毎歳六月十五日より同十八日まで、山を開きて参詣をゆるす。山下に浅間の宮を勧請してあり」（市子・鈴木，1996）。
- 10) ここであげる例は岩科（1987）による。
- 11) 上吉田における御師集落は中世末期には成立が確認されるが、近世期の御師集落は1572年に現在地に移転されたものである（富士吉田市史編さん委員会，2000）。
- 12) K家文書文政元年『参詣人頭掛ヶ割付帳』による。

文 献

- 地方史研究協議会編（1999）：都市・近郊の信仰と遊山・観光。雄山閣。[Chiho-shi Kenkyu Kyogikai ed. (1978): *Worship and Tourism in Urban Area (Toshi Kinko No Shinko To Yusan Kanko)*. Yuzankaku. (in Japanese)*]
- 遠藤秀男（1978）：富士信仰の成立と村山修験。鈴木昭英編著：山岳宗教史研究叢書9 富士・御嶽と中部霊山。名著出版，26-57。[Endo, H. (1978): *Formation of Fuji faith and Murayama mountain asceticism*. in *Fuji, Ontake and Chubu Mountains (Sangaku Shukyoshi Kenkyu Soshu 9 Fuji Ontake To Chubu Reizan)* edited by Suzuki, A., Meicho Shuppan, 26-57. (in Japanese)*]
- 遠藤秀男（1987）：富士山信仰の発生と浅間信仰の成立。平野榮次編：民衆宗教史叢書16 富士浅間信仰。雄山閣出版，3-32。[Endo, H. (1987): *Birth and establishment of Fuji faith*. in *Fuji-sengen Faith (Minshu Shukyoshi Soshu 16 Fuji Asama Shinko)* edited by Hirano, E., Yuzankaku Shuppan, 3-32. (in Japanese)*]
- 富士吉田市史編さん委員会編（1996a）：富士吉田市史民俗編 第一巻。富士吉田市。[Fujiyoshida City ed. (1996a): *Folk History of Fujiyoshida City 1 (Fujiyoshida Shishi Minzokuhen Dai 1 Kan)*. Fujiyoshida City. (in Japanese)*]
- 富士吉田市史編さん委員会編（1996b）：富士吉田市史民俗編 第二巻。富士吉田市。[Fujiyoshida City ed. (1996b): *Folk History of Fujiyoshida City 2 (Fujiyoshida Shishi Minzokuhen Dai 2 Kan)*. Fujiyoshida City. (in Japanese)*]
- 富士吉田市史編さん委員会編（1999）：富士吉田市史通史編 第三巻。富士吉田市。[Fujiyoshida City ed. (1999): *History of Fujiyoshida City 3 (Fujiyoshida Shishi Tushihen Dai 3 Kan)*. Fujiyoshida City. (in Japanese)*]
- 富士吉田市史編さん委員会編（2000）：富士吉田市史通史編 第一巻。富士吉田市。[Fujiyoshida City ed. (2000): *History of Fujiyoshida City 1 (Fujiyoshida Shishi Tushihen Dai 1 Kan)*. Fujiyoshida City. (in Japanese)*]
- 富士吉田市史編さん委員会編（2001）：富士吉田市史

- 通史編 第二巻. 富士吉田市. [Fujiyoshida City ed. (2001): *History of Fujiyoshida City 2 (Fujiyoshida Shishi Tushihen Dai 2 Kan)*. Fujiyoshida City. (in Japanese)*]
- 富士吉田市歴史民俗博物館編 (2003): 富士八海をめぐる. 富士吉田市教育委員会. [Fujiyoshida City Museum ed. (2003): *Pilgrimage of Fuji Eight Lakes (Fuji Hakkai Wo Meguru)*. Fujiyoshida City. (in Japanese)*]
- 富士吉田市歴史民俗博物館編 (2005): 甲斐国誌 富士山北口を往く. 富士吉田市教育委員会. [Fujiyoshida City Museum ed. (2005): *History of Kai No Kuni (Kai Kokushi Fujisan Kitaguchi Wo Iku)*. Fujiyoshida City. (in Japanese)*]
- 富士吉田市歴史民俗博物館編 (2006): 富士を登る. 富士吉田市教育委員会. [Fujiyoshida City Museum ed. (2006): *Climbing Mt. Fuji (Fujisan Wo Noboru)*. Fujiyoshida City. (in Japanese)*]
- 原 淳一郎 (2007): 近世寺社参詣の研究. 思文閣出版. [Hara, J. (2007): *Study on Visiting Temples and Shrines in the Pre Modern Era (Kinsei Jisha Sankei No Kenkyu)*. Shibunkaku Shuppan. (in Japanese)*]
- 原 淳一郎 (2011): 江戸の寺社めぐり. 吉川弘文館. [Hara, J. (2011): *Visiting Temples and Shrines in Edo (Edo No Jisha Meguri)*. Yoshikawa Kobunkan. (in Japanese)*]
- 原 淳一郎 (2013): 江戸の旅と出版文化. 三弥井書店. [Hara, J. (2013): *Travel and Media in Edo (Edo No Tabi To Shuppan Bunka)*. Miyai Shoten. (in Japanese)*]
- 市子夏生・鈴木健一校訂 (1996): 新訂江戸名所図会 四. ちくま学芸文庫. [Ichiko, N. and Suzuki, K. revised (1996): *Edo Meisho Zue, New Ver. 4 (Shintei Edo Meisho Zue 4)*. Chikuma Gakugei Bunko. (in Japanese)*]
- 市子夏生・鈴木健一校訂 (1997): 新訂江戸名所図会 五. ちくま学芸文庫. [Ichiko, N. and Suzuki, K. revised (1997): *Edo Meisho Zue, New Ver. 5 (Shintei Edo Meisho Zue 5)*. Chikuma Gakugei Bunko. (in Japanese)*]
- 井野邊茂雄 (1983): 富士の信仰. 名著出版. [Inobe, S. (1983): *Faith of Fuji (Fuji No Shinko)*. Meicho Shuppan. (in Japanese)*]
- 伊藤裕久 (1978): 御師町の町並と住居—近世御師住居の成立と展開. 高埜利彦監修, 甲州史料調査会編: 富士山御師の歴史的研究. 山川出版社, 26-57. [Ito, H. (1978): *Landscape of religious town. in Historical Study on Religious Priest in Mount Fuji (Fujisan Oshi No Rekishiteki Kenkyu)* edited by Koshu Shiryo Chosakai (Takano, T. supervised), Yamakawa Shuppan, 26-57. (in Japanese)*]
- 岩科小一郎 (1978a): 富士講の系譜. 神奈川大学日本常民文化研究所編: 日本常民文化研究所調査報告第2集 富士講と富士塚—東京・神奈川一. 平凡社, 1-34. [Iwashina, K. (1978a): *Stream of Fuji-ko. in Fuji-ko and Fuji-zuka in Tokyo and Kanagawa (Nihon Jomin Bunka Kenkyusho Chosa Hokoku Dai 2 Shu Fuji-ko To Fuji-zuka: Tokyo Kanagawa)* edited by Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University, Heibonsha, 1-34. (in Japanese)*]
- 岩科小一郎 (1978b): 富士塚概説. 神奈川大学日本常民文化研究所編: 日本常民文化研究所調査報告第2集 富士講と富士塚—東京・神奈川一. 平凡社, 35-52. [Iwashina, K. (1978b): *Summary of Fuji-zuka. in Fuji-ko and Fuji-zuka in Tokyo and Kanagawa (Nihon Jomin Bunka Kenkyusho Chosa Hokoku Dai 2 Shu Fuji-ko To Fuji-zuka: Tokyo Kanagawa)* edited by Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University, Heibonsha, 35-52. (in Japanese)*]
- 岩科小一郎 (1979): 富士講. 神奈川大学日本常民文化研究所編: 日本常民文化研究所調査報告第4集 富士講と富士塚—東京・埼玉・千葉・神奈川一. 平凡社, 1-41. [Iwashina, K. (1979): *Fuji-ko. in Fuji-ko and Fuji-zuka in Tokyo, Saitama, Chiba and Kanagawa (Nihon Jomin Bunka Kenkyusho Chosa Hokoku Dai 4 Shu Fuji-ko To Fuji-zuka: Tokyo Saitama Chiba Kanagawa)* edited by Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University, Heibonsha, 1-41. (in Japanese)*]
- 岩科小一郎 (1983): 富士講の歴史. 名著出版. [Iwashina, K. (1983): *History of Fuji-ko (Fuji-ko No Rekishi)*. Meicho Shuppan. (in Japanese)*]
- 岩科小一郎 (1987): 富士講. 平野榮次編: 民衆宗教史叢書 16 富士浅間信仰. 雄山閣出版, 71-95. [Iwashina, K. (1987): *Fuji-ko. in Fuji-sengen Faith (Minzoku Shukyoshi Soshu 16 Fuji Asama Shinko)* edited by Hirano, E., Yuzankaku Shuppan, 71-95. (in Japanese)*]
- 鎌田道隆 (2013): お伊勢参り. 中央公論社. [Kamata, M. (2013): *Visiting Ise Shrine (Oisemairi)*. Chuo Koronsha. (in Japanese)*]
- 川合泰代 (2001): 富士講からみた聖地富士山の風景—東京 23 区の富士塚の歴史の変容を通じて—. 地理学評論, 74A, 349-366. [Kawai, Y. (2001): *Mt. Fuji as a sacred site: On historical change in Fuji-kou and Fuji-zuka in the 23 wards of Tokyo. Geographical Review of Japan*, 74A, 349-366. (in Japanese with English abstract)]
- 松井圭介 (2003): 日本の宗教空間. 古今書院. [Matsui, K. (2003): *Sacred Space in Japan (Nihon No Shukyo Kukan)*. Kokon Shoin. (in Japanese)*]
- 宮家 準 (1995): 修験道と日本宗教. 春秋社. [Miyake, H. (1995): *Shugendo and Japanese Religion (Shugendo To Nihon Shukyo)*. Shunjusha. (in Japanese)*]
- 長野 覚 (1987): 英彦山修験道の歴史地理学的研究. 名著出版. [Nagano, S. (1987): *Study on the Historical Geography of Mt. Hiko Shugendo (Hikosan Shugendo No Rekishi Chirigakuteki Kenkyu)*. Meicho Shuppan. (in Japanese)*]
- 内藤嘉昭 (2002): 富士北麓観光開発史研究. 学文社. [Naito, Y. (2002): *Study on the History of Tourism*

- Development in Northern Fuji Area (Fuji Hokuroku Kanko Kaihatsushi Kenkyu)*. Gakubunsha. (in Japanese)*]
- 西海賢二(1997): 民衆宗教の祈りと姿—マネキ—。ぎょうせい。[Nishigai, K. (1997): *Pray and Figure of Folkreligion (Minshu Shukyo No Inori To Sugata: Menekin)*. Gyosei. (in Japanese)*]
- 西海賢二(2008): 富士・大山信仰。岩田書院。[Nishigai, K. (2008): *Fuji and Oyama Faith (Fuji Oyama Shinko)*. Iwata Shoin. (in Japanese)*]
- 西海賢二(2011): 東日本の山岳信仰と講集団。岩田書院。[Nishigai, K. (2011): *Mountainous Religion and Religious Group in Eastern Japan (Higashi Nihon no Sangaku Shinko To ko Shudan)*. Iwata Shoin. (in Japanese)*]
- 西海賢二(2014): 旅と祈りを読む。臨川書店。[Nishigai, K. (2014): *Reading Travel and Pray (Tabi To Inori Wo Yomu)*. Rinsen Shoten. (in Japanese)*]
- 大高康正(2013): 富士山信仰と修験道。岩田書院。[Otaka, Y. (2013): *Fuji Faith and Shugendo (Fujisan Shinko To Shugendo)*. Iwata Shoin. (in Japanese)*]
- 大谷正幸(2011): 角行系富士信仰。岩田書院。[Otani, M. (2011): *Fuji Faith of Kakugyo Type (Kakugyokei Fuji Shinko)*. Iwata Shoin. (in Japanese)*]
- 新城常三(1982): 新稿社寺参詣の社会経済史的研究。塙書房。[Shinjo, T. (1982): *Social and Economic Study on Visiting Shrines and Temples New Ver. (Shinko Shaji Sankei No Shakai Keizaishiteki Kenkyu)*. Hanawa Shobo. (in Japanese)*]
- 鈴木昭英(1978): 富士・御嶽と中部霊山。鈴木昭英編著: 山岳宗教史研究叢書9 富士・御嶽と中部霊山。名著出版, 2-24。[Suzuki, A. (1978): *Fuji, Ontake and sacred mountains in Chubu area*. in *Fuji, Ontake and Chubu Mountains (Sangaku Shukyoshi Kenkyu Soshu 9 Fuji Ontake To Chubu Reizan)* edited by Suzuki, A., Meicho Shuppan, 2-24. (in Japanese)*]
- 鈴木正崇(2015): 山岳信仰—日本文化の根底を探る—。中央公論社。[Suzuki, M. (2015): *Mountainous Religion (Sangaku Shinko)*. Chuo Koronsha. (in Japanese)*]
- 山村順次(1994): 観光地の形成と機能。お茶の水書房。[Yamamura, J. (1994): *Formation and Function of Tourist Area (Kankochi No Keisei To Kino)*. Ochanomizu Shobo. (in Japanese)*]

* Title etc. translated by K.M.